新書紹介

よこはまの橋・人・風土

小寺　篤著

秋山書房　B6判　一七七頁　一、三〇〇円

小寺氏は、「横浜の橋」に継いで、再び「橋」の本を著わした。

「橋をみていくと、橋辺の町や村の発展の状況がわかってくる。その地域の歴史を背景に橋の姿が浮き出している」と氏は言い、本市の委嘱を受けて川の調査に携ったときにも、「知らず知らず橋を中心にして流域の歴史をたどっていた」そうである。

こうして書きためられた橋にまつわる史実や人々の生活、あるいは伝説といったものが纏められて一冊の本になった。全市域に散らばる七十八の橋が、氏独特のたぐり綱でたぐられ、街道の橋、商人の橋、……といったふうに興味深く分類されている。

この独特のたぐり綱というのは、「橋と人間との間には密接なかかわりがあった」とする氏の持論の展開であり、かつ、その「密接なかかわり」の有様を自らの手で確認したいとする執念である。確かに氏は、何の変哲もない橋、今はすでにない橋にさえも詩情をはぐくんでいる。

私は机いっぱいに横浜市域図を拡げて、氏が歩んだ足跡を辿ったのである。

〔街道の橋〕まず東海道筋の橋から始まる。東から鶴見橋、今の鶴見川橋、神奈川宿の滝の橋保土ケ谷宿の帷子橋と古町橋、それに元町橋。ここで、広重の東海道五十三次続絵の「帷子橋」はどこにあったか、またその画題がどうして「新町橋」なのかが説かれる。そして戸塚の大橋ここにも広重の絵がある。この橋は今、架替の最中である。

次に大山道。大山参詣の往来のあったという国道246号線の旧道である。ここには、鶴間と瀬谷の間に架かる鶴瀬橋と荏田の下宿橋。渡辺華山が登場する。

それから、戸塚宿の手前、東海道から分れて不動坂を下ったところにあった錦戸橋、今の渡戸橋。この名は、浅瀬を選んで徒歩わたりする場所、渡処（わたど）から来ているそうだ。

中原往還は今の県道丸子中山茅ケ崎線。ここには新道大橋。「新道」とはいってもその呼称は古い。最近、架替工事に着手した橋。

〔商人の橋〕保土ケ谷に金沢橋、同名の橋が俣野町にある。栗木町には塩木戸橋、これ等はいずれも金沢に海産物、特に塩を求める商人の通った道筋に当たるとのこと。

変ったところでは猿橋、今の富士橋。前記渡戸橋をなお先に入った所、県道瀬谷柏尾線にある橋。山梨の大月の近くの猿橋は日本三奇橋の一つとして有名だが、どうしてここに猿橋が。やはり甲州商人とのかかわりが考えられるとか。この橋は今は仮橋、河川改修に合わせて架替を検討中。

〔工業の橋〕鶴見川支流早渕川上流に鍛冶橋がある。港北の勝田橋を「鍛冶田」橋ではないかという説。

外に寺家の水車橋、中村川の共進橋等。共進橋の震災復興時の親柱は野毛の都橋の親柱に転用し、保存されている。

〔開拓の橋〕帷子川の河口、今の横浜駅西口周辺が干拓されて、方々に橋が架けられた。藤江橋、鶴屋橋、内海橋。

松本俊介によって画かれた「Y市の橋」は月見橋であることをつきとめた話。

〔開化の橋〕吉田橋の記述は詳しい。橋上の賑いから橋の歴史、構造に及ぶ。横浜道は、はじめ長者橋に結ばれた話。都橋、大江橋、弁天橋と名だたる橋が続く。

〔歓楽の橋〕吉田川、富士見川等の埋立てによって廃橋となった橋が集められている。今は大通り公園になっている昔の吉田川筋に架けられていた橋の名前は、「橋の詩」になって、地下鉄伊勢佐木長者町駅の壁面を飾っている。

〔信仰の橋〕京浜女子大学の近く、独川に架かる海里橋は「帰り橋」ではないかとの考証。大岡川に架かる道慶橋の小祠の由来。

堀割川に天神橋があるが、これは、岡村天満宮の参詣道。

〔伝説の橋〕上瀬谷の境川に架かる山田橋、舞岡川に架かる東海道の五太夫橋の橋名由来を史実に求める。それに侍従川の伝説。

〔鷹狩りの橋〕大船駅近くの鷹匠橋、阿久和川に架かる鷹匠町橋、鶴見川の鷹野大橋。江戸時代には、鷹場が各地に指定されたと言う。

〔心にかかる橋〕名前だけが残っている橋、昔の姿が偲ばれるが今はない橋、もはや昔の姿をとどめない橋、さまざまな橋が氏の想像の世界に生きている。

＜道路局道路部橋りょう課長　渡辺友孝＞